

趣旨説明



宮脇 千絵

(南山大学人類学研究所・准教授／第一種研究所員)

南山大学人類学研究所の宮脇と申します。よろしくお願いたします。今回のシンポジウムは、人類学研究所と人類学博物館と一緒に企画したもののなのですが、まず、その目的をお伝えしたいと思います。今回のシンポジウムの目的にはふたつあります。まずひとつめは、後藤明先生の「挨拶」にもありましたように、今年、人類学研究所では70周年を迎えるにあたり、その歴史を振り返る作業をおこなっております。人類学博物館と人類学研究所はもともとと同じ組織でした。そこから、研究所のルーツについて振り返ることが今日の目的のひとつです。

一方で、人類学博物館が現在抱えている課題として「民族誌資料をどう研究に生かすのか」ということがあります。それを今回のシンポジウムで、先生方からのご発表を通じて考えたいと思います。国立民族学博物館の実践(吉田憲司先生)や物質文化研究(後藤明先生)、民具研究(久保禎子先生)、考古学(黒沢浩先生)との比較をおこない、今後の博物館活動に生かすことを目的のふたつめとしております。

少し私自身に関してお話しします。私は文化人類学を専攻しておりまして、中国雲南省に居住するミャオ族のうちモンと自称する人たちの装い、特に民族衣装に焦点を当てて研究しております。衣装の研究なので、博物館展示や表象の問題には、ずっと関心を持っています。博物館も好きで、よく見に行くのですが、そこに期待することは3点あります。

まず、時代とともに失われていく、あるいは変化していくモノと、そこに表される意匠、技術、知恵などを知ることです。次に、通文化的、通時的にモノを見渡すことで、比較を行う視点を持つということです。そして、コレクションや展示のされ方から、その博物館の民族誌展示に対する姿勢を知ることです。

このような思いを持って博物館に行くのですが、では、それを自分の研究にどう生かしたらいいのでしょうか。例えば、私は衣装の研究をしているので、とくに衣装の展示を見ます。南山の人類学博物館にも、上智大学西北タイ歴史・文化調査団が1960年代後半から1970年代はじめにかけて収集した資料のなかにモンやヤオなどの山地民の衣装もあるのですが、そこから一つ一つのモノの繋がりについて、例えば、そのモノを使用してきた人、あるいは、文化・社会におけるそのモノの位置付けをどこまで読み取れるだろうかと考えます。このシンポジウムには、このような私自身の課題を解決したいという思いも含まれています。

人類学研究所と博物館の関係について簡単にご説明します。人類学研究所は、1949年に南山大学ができて半年後に、「人類学・民族学研究所」としてスタートを切りました。1954年に「人類学研究所」へと名称を変更しておりまして、今年70周年を迎えます。

ちょっと蛇足的なのですが、当時の日本における人類学の状況をごく簡単に説明したいと思います(図1)。1949年前後の時期は、日本において人類

1949年前後（戦後）の日本の人類学

南山大学

- 1949年9月1日：人類学・民族学研究所が設立される
- 1954年：人類学研究所と改名

東京大学（東京帝国大学）

- 1939年2月：東京帝国大学理学部に人類学科創設（形質人類学が主）
- 1951年4月1日：東洋文化研究所内に人文地理学、文化人類学の二部門が増設
- 1955年4月：駒場の教養学部にて文化人類学・人文地理分科が発足

首都大学東京（東京都立大学）

- 1949年：大学創設とともに、社会学専攻が設けられる
- 1953年：大学院社会人類学専攻が設立される

日本において人類学（民族学）の教育がはじまった時期

- 形質（自然）人類学を「重要研究科目」とする。
- 神言会神父の人類学者の豊富な人的資源を基本前提とする（M・グンデ、W・シュミット）

[渡邊2008]

「総合人類学」

- ヒトの身体形質と人の生活諸方式との両者を二貫する研究。物質文化へも着目（杉浦健一）
- ウィーンで学び、形質人類学、民族学、先史学、考古学など、民族学を一つの総合的な学として存続すべき（石田英一郎）

[三尾2011：469-471]

- 創成期のスタッフ（住谷一彦、岡正雄、鈴木二郎、蒲生正男、祖父江孝男、馬淵東一）

[首都大学東京社会人類学研究室
(<http://www.anthropology-tmu.jp/research/history.html>)]

さまざまな立場、背景を持っている日本の研究者がおり、学界としての共通理解を得ることは難しかった [三尾2011：480]。

図1

学・民族学の教育が始まった時期でもあり、その一翼を担ったのが南山大学でした。他に東京大学、当時の東京都立大学である首都大学東京、この3校が日本における人類学・民族学の教育の創成期を担っていました。しかし、それぞれの大学の目指すところやスタッフの来歴などもさまざまだったので、当時、学界としての共通理解を得ることが難しかったという状況もありました(三尾 2011: 480)。

一方で、人類学博物館も南山大学および研究所と同じ時期にスタートしておりますが、最初は研究所の資料陳列室として、同じ組織の中にもありました。その後1979年に「南山大学人類学博物館」と名称を変更して独立しました。そして、2013年10月に、現在のR棟の地下1階にリニューアルオープンをしております。

後ほど黒沢浩先生のご発表でお話させていただくと思いますが、人類学博物館の資料には、主に民族誌資料、考古学資料、民具資料の3種類があります(図2)。その来歴も、南山大学のカトリック神言会神父による収集のもの、南山大学教員による収集のもの、寄贈資料に分けられます。これらの資料を活用してこれまでに、学芸員の方たちが、論文や報告書を多く発表しています(図3)。そういう意味で、大変活用されている状況にあります。

ですが一方で、人類学と博物館の関わり方、役割というのをもう少し大きな視点で見えていく

南山・人類学博物館の主な収蔵品

| | 民族誌資料 | 考古学資料 | 民具資料 |
|------------|----------------------------|-------------------------------------|---------|
| 神言会神父による収集 | パプアニューギニア・セビック川流域資料 | 関東の縄文時代貝塚 ヨーロッパ・アフリカ・アジアの旧石器時代資料 | |
| 南山の教員による収集 | パプアニューギニア・高山地帯資料 | 愛知県内の考古学的資料 | |
| 寄贈資料 | タイ北部山地民資料 オセアニアの民族造形品資料 | 名古屋市の古墳 | 昭和の生活資料 |

[黒澤2014:1-2より作成]

図2

これまでの活用

・学芸員による論文・報告書発表

如法寺慶大 2015「パプアニューギニア・セビック河流域地方の仮面」『人類学博物館紀要』第33号

西川由佳里 2015「南山大学人類学博物館所蔵のリス族の女性の衣服について」『人類学博物館紀要』第33号

竹尾美里 2014「アンフェンアンガー師のセビック河流域調査と人類学博物館所蔵資料について」『人類学博物館紀要』第32号

木田歩 2009「博物館で資料を観察すること—南山大学人類学博物館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクション整理作業を通して—」『人類学博物館紀要』第27号

林佑 2009「南山大学人類学博物館所蔵パプアニューギニア資料の整理と再考」『人類学博物館紀要』第27号

・ユニバーサル・ミュージアム

黒澤浩 2016「さわる展示の未来—南山大学人類学博物館の挑戦」『ひとが優しい博物館 ユニバーサル・ミュージアムの新展開』（広瀬浩二郎編）、青弓社

[南山大学人類学博物館 (<http://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/>)]

図3

と、また新たなものが問われ始めてきていると感じます。ひとつは、ジェイムズ・クリフォードが言っているように、コンタクト・ゾーンとしての場です(クリフォード 2002: 244)。いわゆるモノを展示するだけではなくて、人が集まる場、空間としてのミュージアムをつくっていかうというような提言があります。また、今日ご発表いただく吉田憲司先生も、フォーラム型、またネットワーク型の博物館を提唱されていて、それを実践されているということです(吉田 1999: 226, 2013: 217)。その背景には、文化人類学や民族誌資料展示などへの反省や批判というものが、1980年代以降、特に増えてきたということもあります。

このように、博物館をベースとした新たなモノと人の繋がり方が模索されている状況において、それをどのように活用していったらいいのかということを考えることは非常に重要になってきているのではないかと思います。

ここで博物館をめぐる人とモノ(資料)の関係をみてみたいと思います(図4、5)。もともと人類学というのは、モノ、物質文化というものに関心を持っていて、人とモノの関係に着目をしてきました。また考古学は遺物や発掘資料、モノからいろいろなことを知ることをしてきました。ところが最近では、博物館がモノを介して人と人をつなぐ場になってきています。博物館の担い手である研究者・関係者だけではなくて、これまで調査される側であった現地の人、あるいは来館者などを含めた新たな人類学のあり方、あるいは博物館のあり方というものが模索されてきている状況にあるのではないかと思います。

今回のシンポジウムで、皆さんにも実際に博物館を見学していただく時間を設けたのもこのためです。博物館資料をどのように見ていったらいいのか、どのように活用していったらいいのかということを考えていきたいと思っております(図6)。

博物館をめぐる人とモノ（資料）の関係

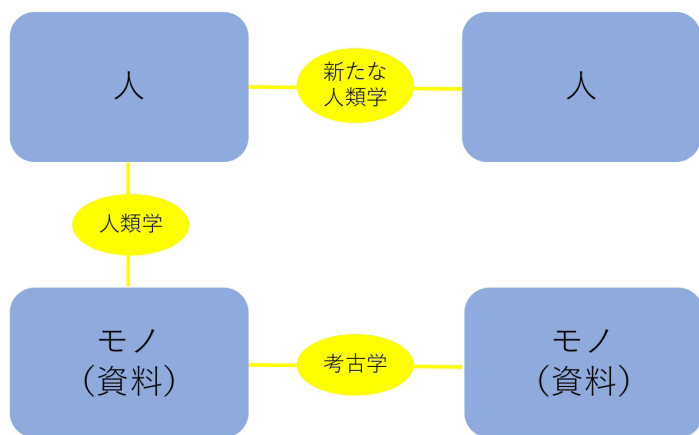


図4

博物館をめぐる人とモノ（資料）の関係

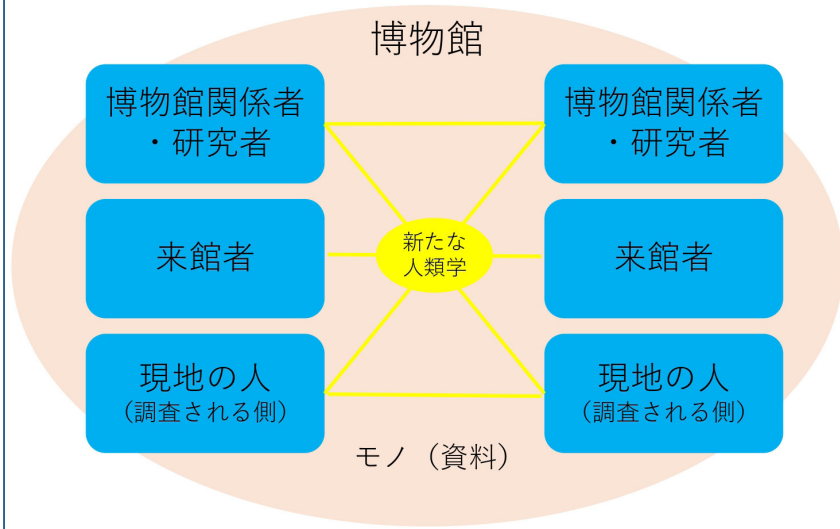


図5



図6

参考文献

クリフォード, ジェイムズ

2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝他(訳)、月曜社。

黒沢 浩

2014 「人類学博物館のリニューアル」『人類学博物館紀要』32: 1-17。

三尾 裕子

2011 「民族学から人類学へ——学問の再編と大学教育」『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』山路勝彦(編)、pp.445-493、関西学院大学出版会。

吉田 憲司

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店。

2013 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店。

渡邊 学

2008 「人類学研究所の歴史と評価」『アルケイア——記録・情報・歴史』2: 63-99。